

にんげん

身から出たもの 2

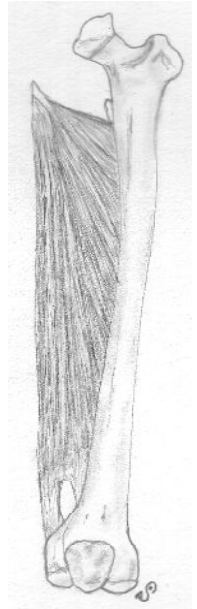
いきなり緊急入院になり、電話を受けたかみさんも多分びっくりしたと思います。しかし、連絡した後は入院の用意やわたしの患者さんへの予約のキャンセルなど、てきぱきとかたずけてくれました。何人かはわたしに直接電話をしましたが、みなさん絶句して息をのんでいるのを電話ごしに感じました。わたし自身が青天の霹靂なわけで、患者さんたちの驚きはよくわかります。検査でわかったS状結腸の狭窄といえば、大腸がんの確率が高く、でもこの時点で、その覚悟は意識的にあと送りにしていました。それにしても、知り合いのK先生が主治医だということが、精神的に大きな支えになっていました。そしてこの偶然の再会は、わたしの人生のターニングポイントになるという思いもしいに膨らんできていました。緊急だったために個室に入院することになりましたが、6階の病室の広い窓からみえる都心の美しい夜景をさすがに眺めて楽しむ気にはなれませんでした。また、駆けつけた84才のお袋の、親父の介護で疲れているこぼった表情が痛々しくかわいそうでした。翌日、午前中に大腸検査の前処理の浣腸がありました。ベッドに寝たまま、若い看護師さんに肛門からぬるま湯を1000ccも注入され、それをおむつに排泄するというやり方でした。しかしおむつのなかに排泄するという行為も、奇妙な違和感はありましたが、さほど抵抗はありません

でした。わたしのなかにのっぴきならない事態という意識が強く働いていたからだと思います。午後からK先生の直接狭窄部位を検診する内視鏡検査がありました。内視鏡の検診は横臥でやるので、わたしのところからも画面が見えて、初めて大腸の中をみました。そして狭窄部位に到達したのですが、狭すぎてその先には行くことはできず、その近くの組織を生検のために切り取りました。終わった後K先生がやってきました。組織の検査は二週間はかかるが、ほぼ大腸がんだらう。狭窄も厳しいので早急に手術をしたほうがよいとのこと。大学病院だとすぐには手術はできないが、ここの病院なら融通がきく、手術は設備より、やる人しだいだから、大丈夫ですよ。わたしの不安を察してそういつてくれました。そして手術は一週間後の26日の金曜日に予定しますといわれたのです。このようにあれよあれよという感じで、手術日が決まりました。大腸内視鏡検査の翌日の20日の土曜日は、超音波による肝臓と腎臓検査がありました。また、体力を維持するために点滴に加えてインパクトという経口栄養剤を一日4パックとることになりました。また、この日4人部屋に移りました。日曜日に弟夫婦とお袋が見舞にきたのですが、お袋の兄の中で最後に残った叔父が今朝亡くなったといひます。ダブルパンチでお袋がしぼんでいるのが気掛かりでした。22日の月曜日は



肺のCT、胃カメラ、肺活量検査などがありました。検査の結果、肝臓、肺、胃への転移はなくほっとしました。検査以外はたっぷりの時間があるので、娘が選んできたミステリー小説を一日一冊のペースで読んでいました。何かに集中して、あれこれ考えないようにするにはわたしの場合は読書が一番だからです。さすがに、手術が近づいたら、読書はやめにしましたが、24日の水曜日は手術のシミュレーションの説明をK先生から受けました。3時間くらいの手術時間だが、どの程度進行しているかは腹を開けないとわからないとのこと。また、状況によっては仮の人工肛門を作るかもしれないといわれました。これまで手術や病巣のことは意識的に考えないようにしていました。しかし、話しを聞いているうちにいよいよだという気持ちになりました。この日の夕方に、手術を担当する看護師さんから手術までの段取りの説明がありました。頭は冷静に聴いていますが、心拍数、血圧もずいぶん高くなって、身体が興奮しているのがわかりました。案の定、夜中に気分が悪くなり、お腹もはって、なかなか寝付けませんでした。やたら隣の患者さんの断続的なイビキも気になりました。早朝は気分が悪いのと軽い嘔吐感がつづいていましたがおさまってきました。手術の前日、体調はかなりよくなってきましたが、神経の興奮はなかなか治まりません。ただ、外面は結構冷静に振る舞っていたようで、周りはそのような動揺を感じなかったようです。手

術前日の夜、生まれて初めて睡眠薬を頼みました。眠ったほうが身体にプラスに働くと思ったからです。しかし、その睡眠薬も期待したほどは効きませんでした。吐き気が続いたためベッドを立ててお腹にホットバックをして幾分楽になりました。明け方に吐き気止めの座薬をいれてもらいかなり楽になりました。そしていよいよ手術の当日になりました。午前中は時間がたつのがはやく、いよいよ午後手術の時間がきて、段取りどおりに家族とエールの交換をして、ストレッチャーに乗り手術室に向かいました。手術は3時間半で無事終わりました。やはり結腸がんでした。誰かに呼ばれて気がつくとも家族の顔が目前にありました。みんなほっとした顔でした。しかし、わたしの意識ははんぶん眠っているような感じがしていました。それからナースセンターの横の特別室に移送されたのです。時々看護師がきて話しかけられたけれど、ずっとぼんやりしていました。夜遅くなって特別室に誰かが運ばれてきました。付き添いの人達のぼそぼそ話す声から、一人暮らしのつましい高齢の女性のような感じです。わたしの意識はまだぼんやりしていて、断片的に聞こえる声はまるで夢の中で聞こえているようでした。結局、その方は明け方に亡くなり、ばたばたとあわただしい動きがありました。この特別室の中で、生と死が交錯したのでした。全てがしんと静かになると、なんだかわたし一人取り残された気分がしたのです。



かん さつ